

令和2（2020）年度前期  
授業評価アンケートの結果と分析及び提言  
—PDCA サイクルに向けて—

教養教育院総務委員会委員長  
南川慶二

## 目的

大学教育に関しては、教育目的・目標の明確化やその到達度、さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために、学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第3期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、双方向のPDCA サイクルを確立し、徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

## 実施方法と時期

令和元年度と同様に、毎回すべての授業科目群を対象として期末に実施することとしたが、本年度は新型コロナウイルス感染防止のため前期の授業開始が遅れ、5月から遠隔（オンライン）授業限定で開始し、6月から一部の対面授業と遠隔授業が混在した状況となった。開講時期の変更とオンライン化への対応に多くの労力を要したことに伴い、アンケートは通常よりも遅い令和2年7月16日～8月21日に実施した。教員に対しては、授業実施報告書の提出（令和2年9月末まで）として実施した。通常の項目に加え、遠隔授業で良かった点と不都合の有無を尋ねる項目を自由記述式で追加した。

## 結果と分析

### 1) 回収率

令和2年度前期の期末アンケート回収率は62～72%であった。各科目群の回収率は、一般教養(69%)、グローバル(71%)、イノベーション(72%)、基礎基盤(68%)、汎用的技能(66%)、地域科学(62%)、医療基盤(70%)、外国語(67%)であった。昨年度と同様に、科目群間の違いは10%程度と大差なく、分野よりも個々の授業による違いの方が大きい。全体的に直近の昨年度後期よりもわずかに向上しているが、昨年度前期と比較すると低い。毎年前期は後期よりも回収率が高い傾向にあるが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のためオンライン授業が多く、アンケートの回答を促す説明が不足したことが前期としては回収率が低い原因の一つと考えられる。今後も新型コロナウイルス感染対策でオンライン授業が多く行われると予想されるが、特にオンデマンド形式では学生への通知が一面的になりがちであり、回収率向上のためには引き続き対策を考える必要がある。

### 2) 受講環境について

今回のアンケートで最も注目すべきことは、前期開始直前まで想定外だった遠隔授業の実施による影響である。アンケートの項目を追加して、遠隔授業で良かった点と不都合があった点について調査したところ、非常に多数の意見が寄せられた。これまでのアンケート分析では講義室の環境について

の項目を設けていたが、今回は自宅での受講が急増したため、最初に受講環境の変化について学生の意見をまとめておく。

自宅で遠隔授業を受けることについて、肯定的な意見として「感染の不安がなかった」「時間的余裕があった」「常三島・蔵本キャンパス間の移動が不要」などが代表的なものである。「私語がないので集中できる」「語学の発音を静かに練習できる」なども利点としてあげられている。

また、遠隔授業ではオンデマンド形式も多く、ライブ配信でも録画を資料とする場合には、「何度も資料を見返すことができる」「自分のペースで進めることができる」「録画や資料を残してもらえらるので復習に役立った」などの肯定的な意見が目立った。

一方、遠隔授業による受講環境の不都合な点としては、「自宅のインターネット環境が整っておらず最初の授業に参加できなかった」「当初はパソコンの使い方が分からず、出席できているか不安になった」などのコメントに代表されるように、入学直後の1年次前期授業ではインターネットの接続やPCの取り扱い自体が障壁になる学生も存在することには注意が必要である。自宅でのインターネット環境がない学生には大学で受講させることにしていたが、「大学のWi-Fiが弱く繋がりにくい」というコメントが非常に多数見られたことから、学内のインターネット接続環境も十分ではなかったことが明らかになっている。各授業についてのコメントから、どのように支障があったか具体的に把握できる。「講義資料のダウンロードができない」「接続が切れる」「画面が固まる」「音声が飛ぶ」など様々であり、特に語学では音声が途切れることで聞き取りができず「発音がわからない」という意見が多数の授業で見られた。語学以外の一般的な授業でも、宿題の説明などの重要な情報を聞き逃した場合など、一瞬の不具合でも大きな影響があることが指摘された。さらに、「Wi-Fi環境のことを言うと言いついに聞こえるという先生もいたので意見を言いにくかった」という意見から、このような状況があることを教員が把握して適切に対処することが求められる。

その他の遠隔授業による受講環境の変化として、PCの画面を通した受講では大人数の講義でも黒板やスクリーンが見えにくくて困ることがないという物理的な改善や、「他の受講者の名前や顔が表示されて良かった」「対面では萎縮するが遠隔だと積極的に発言・質問できる」など、心理的な面で教員や他の学生との距離が縮まり、コミュニケーションに有効とみられる意見もあった。

### 3) 教員の授業に対する取り組みについて

各教員の授業内容や方法等についても、自由記述のコメントには遠隔授業についての意見が多かった。まず実施形態については、良かった点として「遠隔か対面かを自分で選ぶことができた」「始まったばかりの4月にTeamsでのライブ講義が決まっており、授業の進め方が毎回一貫していたので安心感を覚えた」という意見があった。不都合な点として「動画配信やライブなど方式が毎回変わる(オムニバス授業)/Teamsのリンクが毎回変わると他の授業と混ざって混乱する」という例もあった。遠隔授業は前期開始直前に導入されたことから、準備に追われて試行錯誤していた教員も多かったことから、多少の混乱が生じたようである。5月に授業が始まってしばらくすると、授業によっては学生の意見を取り入れて改善していた様子が伺えるコメントの例もある。「学生をすぐに反映しどんどん面白い授業になっていくのはすばらしかった」「会話主体から遠隔授業で筆記主体へと変わった。シラバスの目的を変えて新しい良い授業になった」「不安がないかなど精神面のことにも気をかけてくれた」などが、教員の対応が良かった点として挙げられている。

遠隔授業では学生の様子を把握することが難しいこともあり、学生が能動的に参加できるように工夫している例が多数見られた。出席確認のためのレポートを毎回課すことで理解度向上に役立ったと

いう例が多いが、中には「課題が多すぎる」「授業時間を超える動画視聴(90分授業で150分以上)」など、課題が過重負担となった例も散見される。

Zoom等の遠隔授業ツールにはそれぞれ独自の機能があり、活用した例がいくつか見られた。アクティブラーニングを遠隔ライブ授業で実施した例として、ブレイクアウトルームが多く利用されている。チャットやライン通話を使った学生相互あるいは教員とのコミュニケーションを実施した授業も良い点として示されている。

#### 4) 学生の授業に対する意識

緊急事態宣言期間に外出自粛を余儀なくされ、課外活動も制限されるなど、学生生活に大きな影響があった。このような状況で、アンケートの自由記述は学生たちが遠隔授業にどのように向き合っていたのかを知る手がかりになる。「一緒に学ぶ友人と会えない」「課題が多すぎて本当につらかった」という記述から、自室で黙々と課題に取り組む姿が想像できる。「レポートに対するレスポンスがない」「友達と話ができないので自分がどのように評価されているのか不安になる」などの感想も多く、遠隔授業の準備に追われてフィードバックに手が回らない教員の様子も感じられる。このように多くの学生が苦勞しながら受講している中で、「授業妨害する人がいた」というコメントも少数ではあるが存在した。対面での出席確認ができずオンラインの小テストや課題提出のみの場合などは、受講するためのモチベーションを保つことが困難なこともあると推測される。学生自身は自分が熱心に受講できなかった場合でもアンケートに素直に書くとは限らないとも考えられる。さらに、アンケートに回答しない学生が30%程度以上存在することから、学生の意見も参考にして、主体的に受講する意欲を維持できる状況を作り出すことが求められている。

#### 総括

遠隔授業についての様々な意見から、学生の学修や日常生活に大きな変化が生じたことが読み取れる。BYODの導入時に課題となっていたe-learningの活用が外的な要因によって急激に進んだことは、教員の授業設計や実施方法も一変させた。対面授業が制限された条件のもとで多くの教員が試行錯誤しながら教育方法の改善に努力している。オンライン化により授業コンテンツがデジタルデータとして蓄積されつつあることから、それらを活用すれば個々の教員自身の振り返りや教員間の情報交換、さらには第三者による検証等の容易になり、授業改善に活用できることが期待される。コロナウイルス感染対策は引き続き必要とされており、学生の声を手がかりとして情報交換を進める必要がある。それに加え、外出自粛の影響で孤立する傾向にある学生の中には、不満を感じていてもアンケート自由記述欄に書かない(書くことができない)場合もあると推測される。顕在化していない不都合な状況も多々あると考えられる。アンケートの項目を追加したことで多数の意見を収集することができたことから、今後も内容や実施方法の継続的な見直しによる改善の必要性が示唆される。